第一の狐と葡萄

（新イソプ物語の二）

安成貞雄

第一の狐が『あの葡萄は酸ばいぞ』と呟きながら、空腹を抱へて森の穴へ歸つて行くと、途中で森の方から來る仲間に遇つた。其の第二の狐は云つた。

『妙に不景氣な面をして居るじやないか。どうしたんだい？』

『不景氣な面にもならアな。腹がペコペコで御出での所へ、やつと見つけた旨相な葡萄が酸ばいと來て居やがるんだ。忌々しい！』

『そうか。そんなに酸ばかつたんかい？』

『だらうと思つたんだ。』

『何んだ、喰つて見たんじやないんかい？』

『棚が高くつて取れやアしない。あんなのは、酸ばいに極つてる。』

『何處にあるんだい。』

『その葡萄棚は？』第一の狐は例の一寸ふり反つて、鼻先きで教へた。

第二の狐は『どうだ、森へ歸つたつて、ロクな物は無わぜ。もう一度一所に行つて見やうじやないか』と云つたが、第一の狐は、『飛び上るだけ腰い減り損だ。歸つて寢よう』と謂れて行つた。

第二の狐には、妻子があつた。自分も妻子も人間に壓迫されて、ロクに物を喰はさに居る。酸ばくつてもいゝから子狐に食べさせる分だ。でも葡萄を取らうと思つて葡萄棚へ行つた。見ると、人間が葡萄棚へ横手をかけて、葡萄を採つて居る。折々それを喰ふのを見ると、如何にも旨相だ。第二の狐はクビ〳〵と咽を鳴らしながら、籔の中に隠れて居た。

其のうちに人間が行つてしまつたから第二の狐は棚の下へ行つて、第一の狐の様に飛び上つた。けれども、矢張り届かなかつた。第二の狐は仕方なしに歸らうとすると脚下に一房人間が落して行つた葡萄があつた。食つて見ると非常に旨かつた。それで大喜びで森へ歸つて妻子にも食べさせた。此の話は直ぐ森の狐仲間の大評判になつた。ロク〳〵物を食べない狐はそれとばかり、そわ〳〵葡萄棚に押しかけた。第一の狐だけは、悟つたらしい顔をして、仲間にはいらなかつた。

一同が行つて見ると、葡萄棚は矢張り高くつて狐の力では届かなかつた。それに人間の方では狐が押し寄せるのを見て、犬を飼つたり、鐵砲を備へたりして、葡萄を採らせまいとした。犬や鐵砲の爲めに、何度も失敗したので、狐の仲間ではソロ〳〵第二の狐を疑ふものが出來た。葡萄を食つたと云ふは嘘だらう。旨くはない酸ばかつたらうなど云ひ出した。

此の樣子を見た人間は、第一の狐を手なづけて、諦めさせ樣とした。他の狐には所有權がないと論じさせた。併し、狐の食物はだん〳〵乏しくなつて來たので、狐は葡萄を採ることを斷念しなかつた。人間と狐との爭ひは段々烈しくなつた。其のうちに、狐のうちの智慧のあるのが、棚のある地面は、昔し狐仲間の共有であつた。葡萄も野生てあつて、狐仲間の食物であつた。人間はそれを掠奪したのであると云ふことを知つた。狐の葡萄棚を取り返す運動は、これで愈々烈しくなつて來た。

すると、人間の方では、葡萄の食ひ殘りや、不出來なのやを投げ出して、狐を溫順にしやうとしたり、狐のやり方は、秩序を破壞すると論じたりした。そして一致團結して、犬をふやし、鐵砲を增し葡萄棚を高くした。狐の方でも、もとから、小さな團体を作つて居つたが、やがて世界中の狐が團結しなければならないと云ふことを說く者が出て、其の說が世界中に弘まつた。世界中の狐は、其の說に從ふて團結した。其の力で、世界中の葡萄棚は忽ち皆狐のものになつた。

狐が十分に葡萄を食べると、不思議な事には皆人間に變つた。是れは極く少數な人間が、自分等の勝手氣儘をする爲めに、魔法を使つて多數の人間を化して、狐にして居つたからであつた。

是れを見ると、自分も魔法に掛て居る仲間だとも知らずに、同族を裏切つた第一の狐は、其の仲間をつれて、第二の狐の所へやつた來て、最初、葡萄棚を敎へたのは俺だから、どうか葡萄を少しわけてくれと、恥かしげもなく手を出した。

金持と貧乏人

堺利彦

甲『君は金持が好きか、貧乏が好きか。

乙『人を馬鹿にするな。俺は金持になる程の罪は作りたくない。

甲『ちや君は貧乏が好きか。

乙『貧乏は好きちやないが、金持は嫌ひだ。

甲『それちや世界中の人間を皆な貧乏人にしたら、君は嘸ぞ嬉しいだらう。

乙『あんまり嬉しくもないが、それでも今よりや增しだ。

甲『そうかなア。僕は又、世界中の人間を皆な金持にしたら嘸ぞ愉快だらうと思つてる。

乙『それは愉快かも知れんが出來ない相談だ。それよりか金持を無くする事を考へた方が早道だ。

甲『そうかなア。僕は又、貧乏人を無くする事を考へた方が早道だと思つてる。

丙『甲乙兩君。先つきから聞いてると、君達は二人とも變な事を云つてる。金持を無くするのも、貧乏人を無くするのも、つまり同じ事ぢやないか。

甲『同じ事なもんか。貧乏人を無くすりや金持ばかりになるが、金持を無くすりや貧乏人ばかりになる。

丙『馬鹿を云ちやいかん。金持があるからこそ貧乏人があるんだ。貧乏人があるからこそ金持があるんだ。

乙『だから皆が金持になるなんて出來ない相談だ。

丙『そうだよ。其の通りだよ。然し乙君、皆が貧乏人になるなんて事も、出來ない相談だよ。

乙『それはどうだか知らないが、皆が貧乏人になるんなら、俺は我慢が出來ると云ふんだ。

丙『所が乙君、金持があるからこそ貧乏人があるのだ。金持が無くなつてしまへば、貧乏人といふ者も在りやしない。

甲『貧乏人が無いんなら、矢張り皆が金持になるんぢやないか。

丙『所が甲君。貧乏人があるからこそ金持があるのだ。貧乏人が無くなつてしまへば、金持といふ者も在りやしない。

甲『それちや何んだか譯が分らない。金持でもない、貧乏人でもないと云へば、皆はどうなるんだらう。

乙『だから矢張り皆が貧乏人でいゝぢやないか。俺はそれで澤山だ。金持といふ癖にさわる奴等さへなけりや、俺ア皆と一緒に粥を啜つても滿足だ。

甲『皆と一緒に粥を啜つても滿足するくらゐなら、皆と一緒に旨い飯を食つたら猶ほ滿足だらう。

乙『當り前さ。それが出來ないから粥でも啜らうと云ふんだ。

丙『所が乙君、皆が一緒に旨い飯を食ふ法があるんだ。

甲『それなら矢張り皆が金持になるんぢやないか。

丙『そう云ひたいならマアそう云つて置きたまへ。然し金持のある間は、どうしても貧乏人は無くならない。皆が一緒に旨い飯を食はうと云ふには、金持もない、貧乏人もない、新らしい社會を拵へるより外はない……

乙『ウン、それなら俺も賛成だ。俺だつて何にも貧乏が好きぢやない。×××賛成。×××賛成。

甲『それなら僕も賛成だ。僕が皆を金持にすると云ふのも矢張り其の意味だ。×××賛成。×××賛成。

丙『よしよし。それで兩君の意見が一致したわけだ。所で、どうしたら其の×××が實現されるか、そこが考へどころだ。

乙『金持の奴等がキツト反對するだらう。

甲『ナニ、金持だつて、よく其わけを話したら分るだらう。

丙『サア。話したくらゐで承知するかどうか。

乙『ナニ構はない。分つても分らなくても、承知しても承知しなくても構はない。俺が行つて×××××××來る。

甲『オイ、マア待ちたまへ。そんなに騷いだつて仕樣がない。

乙『馬鹿ア云へ。俺アもうグズグズしてゐられない。

甲『オイ、オイ。マア待ちたまへと云ふに。あ、あ、とうとう行つちまつた。仕樣のない慌て者だ。

丙『ナアニいゝよ甲君。放つておきたまへ。あれもいゝんだよ。